

もういちど、 自然や歴史から わがまち、竹原を考えよう

2017年2月26日(日) AM：忠海の歴史を巡るまちあるき

PM：哲学対話@忠海公民館

【忠海まちあるき】

朝9時に忠海公民館に10名ほどが集まり、忠海で代々呉服店を営まれている山本さんのご案内でまちあるきを行いました。まず、地蔵院①、次に朝鮮通信使や浅野のお殿様が止まった誓念寺②をまわり、忠海八幡神社③に行きました。そこでは、たまたま神明祭がおこなわれており、獅子舞を見ることができました。忠海の獅子舞は雄の獅子舞で珍しいものということで、戦勝祈願のこの祭は400年の歴史があるそうです。とんどがきれいに高く細く積んであるのが印象的でもありました。そこから、町奉行所のあったあたりを見学し、本立寺④、勝運寺⑤へ。勝運寺には村上水軍を束ねた乃美宗勝の墓所があります。その後、海の鎮守である胡神社⑥を巡って、乃美宗勝の山城である鍵城⑦に上り、忠海港を通過して公民館へ戻ってきました。



【哲学対話@忠海】



午後からは約 20 名ほどの方に集まっていた
だき、本日も上智大学の哲学教授、寺田先生
による哲学対話が始まりました。

「まずは午前中のフィールドワークへ参加さ
れた方に考えた事、感じたことを自由に話し
て頂き、参加されなかった方もそれにのせて
お話し頂きたいと思います。東京方面から来
た方もいらっしゃるのでは、よそから来て感じ
たことも話して頂ければ、と思います。」

まちあるきの参加者が、「お寺が多いと感じました。一つ一つの歴史が感じられ、豊かな町
であったと思いました。また、山に断絶され、コンパクトに一つにまとまった町だなあと
いう印象です」と発言すると、広島県安芸郡坂町の横浜から参加された方からは、「地形は
横浜と同じように感じましたが、わがまちよりも要塞型になっていると思いましたねえ。
こちらは歴史が長い。海運が栄えており、反対は山で海からしか攻められなかったのだら
う。忠海にはアヲハタなど何社か忠海発祥の有名企業があるが、横浜にはなぜ独自の産業
が興っていないのかなと、疑問に思いました」と率直な疑問が提起されました。

今日のまちあるきの案内人の山本さんからは、

「江戸時代から商船が入ってこれて、一大商用地になったという歴史があります。商人が
廻船にきたので船宿も沢山あり中国地区で
は一番大きな旅館があり遊郭も栄えた土地
です」と説明があると、再び参加者から「海
側から見たらヒト・モノ・カネの流れがあり、
非常にエネルギーが高いところだったんだ
なということですね」「忠海には、広島城が
築城される前から城があり、町があったん
ですよ」と応答があり、「海運で栄えたのは問
違いはない」と話がはずみました。



港として栄えた歴史について、地元の詳しい方から次のような話が聞けました。

「なぜ忠海の港が栄えたかは、自然の形状で入江になっていたからだと言われています。
産業がどうのこうのというのではなく、風が吹いてきたら逃げ込む港だった。そこが始
まりではないだろうか」「このあたりで竹原湾が港として選ばれなくて忠海が選ばれたのは、
川がなかったからです。川があると砂が出てきて湾が埋まってしまう。忠海は川がないか
ら船が留まることのできたらしい」など、天然の地形の恩恵だとする説。そして、港に適

した深さのある海になった理由について、「地下水が流れこんで、海底を掘っている可能性がある」と新聞に書かれていたことがある。山からの地下水でスナメリクジラもやってくる豊潤な海を作っていたのではないかとする地下水の恩恵だとする説も披露された。



そのほか、午前中まちあるきをされた女性から、忠海の印象として、「お寺に竹原では見られない彫ったものが多く飾られ、端々に灯籠が置かれていたり、海への思いや形が表れているまちだと思った」と語ると、「常夜灯が海から船で見る時に灯台の役目をしているんですよ。とんでもない山の中に常夜灯があったりするが、海から川を船で遡っていたんでしょね。流通があったところは常夜灯がある

のではなかろうか」と物資が川の上流まで運ばれていた歴史も明かされました。

東京からの参加者が、「瀬戸内海に来ると水平線と島が見え自然が素晴らしいと思った。もう一つ素晴らしいと感じたのは、まちを歩くとすぐ歴史を感じられる。地元の皆さんがよくご存じなのが羨ましいと感じた」と言うと、地元の方は、「わざわざ勉強したことはないが、口伝で聞いてきた。若い人たちは興味がないようですけど・・・。」「私がおじいさん、おばあさんから伝えられてきたことは、時々、日本史の教科書とは違うことがあります・・・。」との歴史観が述べられました。

さらに、つづけて東京からの参加者が、「地域創生ということで、町をどうするかという視点を今日は初めて持った。『この町を住みやすくするには』や、どう使えるのか等を考えながら歩いた。ミカン畑もありジャムにして売ったら、など考えたが、人がいないという現実があったりして…。田舎で暮らしたい東京の人はたくさんいると思うが、それをどのように繋げたらいいのか、など考えました」と発言すると、地元の方々から、「素晴らしい土地にもかかわらず、なぜ人は戻ってこないのか。なぜ仕事がなくなったのか」「交通の便が限られているので、働きたくても働く場所がない。昔は海運だったから地の利は良かったけど・・・。」「産業構造が変わり、海運が重要な流通業だったが、今はトラック・航空が大事。状況が変わったから仕方がないという事ですかね」「終戦になって軍隊がいなくなったり、竹原市と合併してお役所がなくなり、就労人口が少なくなってしまった、ということもある」など、環境変化によって、来る人がいない、仕事がなくなったなどの現状が語られました。

ここまでの対話の流れから、ファシリテーターの寺田先生が、「歴史の流れの中、状況、人々の暮らしは変わっていく。忠海の人には忠海の歴史があり、竹原の人には竹原の歴史があり、食い違うこともある。この隣同士の地域で違うのが面白いと感じました。変わっていった地域の歴史を学ぶことの意味を後半は考えていきたい」とまとめて、休憩となりました。

後半は、「地域の歴史を学ぶ意味、重要性を哲学的に対話しましょう」ということで、8人ずつ2グループに分かれて、対話をすすめることになりました。



参加者の方から、地域の歴史を学ぶ意味について、次々に意見が出ます。

「歴史を学んだほうがいい。世の中が変化している中で、自分の生きる道を探る方法のひ

とつではないか」「歴史を学ぶ理由は個性の母体みたいな気がする。個性の母体には土地の歴史があり、それを提示できるようになるのが重要」「それは、歴史というよりルーツに近いのでは?」「バックボーンがしっかりしていないと、世界に出て行っても個性がないことになる」「自分のアイデンティティが歴史の中にあるのではないか」「日本は、お茶にしても剣道にしても、決まったマニュアル通りのものを繰り返していくうちに自分のものを見出していく『型』の教育文化であった。昔、おじいちゃんおばあちゃんは、私に生き方の方法と戦略を見つけるために、知識として歴史を教えたのだろう」「日々の生活が文化で、その積み重ねが歴史なのではないか」

そこで、ファシリテーターから、「そうするとわざわざ学んだりするというより、生活している、そのこと自体が歴史となるという事になりますよね」という疑問が提示されます。すると、「どのように生き延びていたかを学ぶと、我々の次に生きるのではないかと思っている」「忠海も敵になったり味方になったりして生き延びてきた歴史がある。その時の強いほうについているんだろう。それも生き方としては重要で学ばなければならない」「歴史には失敗も成功もあって、受け継いだ情報の中からふるいにかけることに意義があるというのには共感した。負の歴史を学び、同じ過ちはしないという決意もできる」「いつの時代も、何らかの関係性の中で生きている」と、歴史を学ぶ意味は、生き方を学ぶ、そして過去から学んで判断できるようになるという話に及びました。

「歴史は正しい正しくないではなく、誰か歴史家が解釈して書いたものである。過去を振り返ることによって未来が見えてくるという気がする。今日は山本さんというレンズを通して映像にした歴史ドラマを見させてもらった気がした。そこから何を学ぶかだと思う」と歴史を学んで、これからにどう活かすのかという考え方が明らかになってきました。

これまでの話を受けて、「これからどんな未来を見るのか」については、次のように話が進んでいきました。

「我々のような歴史を知っている大人が語らなければならないと思う」「歴史の中には、屈辱も失敗も成功もある。生き様だと思う。ふるいにかけてそれを次の時代に渡していかなければいけないんじゃないか」「この町には幼稚園や小学校を、私財を投げ打って貢献した人が沢山いる。」「先人に学んで私も町のために何かしたいと思う。」「教訓めいた歴史を提示して、過去の先人がこのように頑張ったから繁栄した、という歴史について、次の世代の教科書になるものを残してあげたい。それが博物館、資料館の役割で、語れる人がいないので、今じゃないと出来ない。これをまとめるうちにやるべきことが見えてくるんじゃないだろうか」「今、歴史に学び、文書なりで仕組みを作っておかなければならない」「人



の交流、コミュニケーションが重要である。大きな核を歴史から持ってきて、それに伴い優秀な人が集まってくる。その仕掛けとして今日は哲学という文化を通じての人脈づくりで、資本家、芸術家などいろいろな方たちと、絶えず人の交流が必要である」
このように、何かを残しておきたいという意見が多く出されました。

最後にまた一つのグループになり、それぞれのグループで話されたことを簡単に述べ合っ
て哲学対話は終了となりました。

(グループ1)

「忠海の歴史として語られていることでも、あてにならないものがいっぱいあるということから始まり、過去のことより未来を考えたほうがいいのでは、となった。過去のことを破壊してというのではなく、伝統みたいなものは活かしながら未来のことを考える。また、地域の歴史を知る意味を考えたが、楽しいから等々もあつたが、防災に役立つ（津波がここまで来たことがある等）、歴史がわかって説明できるとこの町に興味を持つ人が出てくる、郷土愛があるから町のことを知りたい、伝えたい、という意見が出ました。」

(グループ2)

「こちらのグループでは、歴史を学ぶことの意味を考えた時、個性の母体であるという話がでた。歴史とは日々の生活からしか生まれないので、過去の人達がどのように暮らしていたか学ぶことで、歴史が積み重なる。そして、それは生活に密着しているもの。また情報を取捨選択する、ふるいにかける、これからを判断するのに役に立つものだという意見もありました。教科書の記述と口伝と一致するとすごく面白い。歴史は正しい正しくないではなく誰かの解釈による。後世に伝えるためには、何か提示する必要があるといった内容が話されました。」

最後に、寺田先生は、全体を次のようにしめくくりました。

「今回の対話を入り口にして、歴史を伝えるというのはどんな意味があるのか等、もっと深めていただきたいと思います。皆さんは、まちのことを普段から考えてはいるけれど、これだけの人とじっくり言葉を交わすこともない。町をどうするかきちんと考えるための下準備に過ぎないが、大事にして頂きたいと思いました。人と話して自分が考えていることがはっきりしたりする。人と話しながら考えているうちに自分の意見が変わっていくことが、哲学対話の一番大事で面白いところなのです。また機会がありましたらこうした哲学対話にご参加ください。」